
薔薇の咲き誇る庭で

紫華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇の咲き誇る庭で

【Nコード】

N1167A

【作者名】

紫華

【あらすじ】

主人公の雅也は、小さい頃から見続ける夢がある。寂しげな金髪の女の人と薔薇の華。中学生になり、その夢の女の人によく似た女の子に出会うが実はその子の正体は……。

第1章

第1章 薔薇の華咲く バラノハナサク

小さな頃からいつも見る夢がある。

遠くから聞こえる女の人の声。その声に振り向くと遠くに見事な金色の髪の女の人の後ろ姿が見える。「どうしたの？」と尋ねたいのに声が出ない。金髪の女の人は僕に気付いて振り返る。その瞳はまるで深い海の底の様にどこか悲しげで、吸い込まれそうな不思議な気持ちにさせる。女の人は僕から瞳をそらす。その視線の先には薔薇の華があった。

そう・・・あの呪わしい華が。

僕、岩崎雅也が生涯をかけて愛する女性・・・冷条聖架へと送る。

君と出会ったのはもう何年前になるのだろう。

まだ恋も知らないような年だったのに、君に出会ってすぐに人をいとおしく想う気持ちを知ったんだ。小さい頃から見続けた夢は君との出会いを暗示していたんだとわかった。

君と出会ってからのことを思い出してみよう・・・。

第1章（後書き）

初めての投稿です。ドキドキです。>><<
感想くれると嬉しいです

第2章

第2章 芳香に誘われて カオリニサソワレテ

僕が中学生に上がったばかりの春。

ずっと欲しかったゴールデン・レトリバーをやっと飼うことができた。その犬には、トムという名前をつけた。産まれて3〜4ヶ月というところだろうか。小さな身体には不釣り合いな太い脚。尻尾を元気よく振って、好奇心に満ち輝いた瞳。ただ好奇心旺盛すぎて散歩の度にリードから逃れては、僕を困らせた。

君と出逢った日も、僕は逃げてしまったトムを探していた。住宅街で周りは似たような家ばかり。散々走り回ってもトムの後ろ姿ひとつ見つけれなくて、家に帰ったらトムも戻ってるかもしれない。・なんて思い始めた頃トムの吠える声があった。声を頼りに走っていると、目の前を急に塞いだものがあった。

物凄いお屋敷だ。

表札には『冷条』とあった。僕の家からそう遠くないこの場所に、こんな大きなお屋敷があるなんて聞いたこともなかった。これまで気付かなかった事を疑問に思いながらも、僕は半開きの門を通り庭の中に進んでいった。

丁寧に手入れされた花々。

見事に並ぶ彫刻。

咽返るほどの華の香り。

まるで中世のお城にでも迷い込んだかのような気にさせる圧倒的な大きさの屋敷。

それら全ては僕がトムを探しに来たことを忘れさせた。

ふと僕は薔薇園という文字が目についた。フェンスが張り巡らされ

たその中には、深紅の薔薇が咲いていた。他の花は周りの花壇に入り混じって乱れながら咲いているのに、薔薇の華はその輪の中にはひとつとしてなかった。

薔薇も一緒の方が華やかなのに……。棘が他の花を傷つけるからかなあ……。なんて思ってたなら、いつの間にか僕の足元にはトムがすり寄っていた。何か怯えているかの様に耳は下がり、元気がなくなっていた。それでも僕は何かに呼ばれるように薔薇園の奥に進んで行った。そこには一人の女の子が薔薇を見つめていた。見事な金髪の少女が……。

そう、まるであの夢を起きながら見ているような感じ。

それとも僕はいつの間にか夜の深い眠りについたらだろうか……。トムは一段と怯えているようだった。

今度こそ声をかけなくちゃ。なのに声が少しも出ない。僕はこの屋敷の門をくぐった時に声を落としてきてしまったのだろうか。

トムが僕に「帰ろう」というようにズボンの裾を噛んで引つ張った。僕は少しよろけて薔薇の茂みに当たった。ガサツという音で金髪の少女は振り返る。その瞳は驚きに見開かれていた。やっぱり夢と同じで深い深い海底の瞳。

だけどその後の少女の反応は夢とはだいぶ違った。

少女は悪戯をしているのを母親に見つかってしまった子供のように、誰にも見られてはいけない事を見られてしまったかのように脅え、慌てながら屋敷の中へ走り去った。

まるでガラスの靴を落としたシンデレラ。

あの髪によく似合いそうな金のネックレスを落としていった。

細やかな細工の施された物で、僕が見ても一目で高いと分かる代物だった。よく見るとロケットになっていて、開けて中を見てみると幸せそうに微笑みながら寄り添う男女の写真が入っていた。

彼女の両親だろうか？

そうならばすぐに返してあげなければ。

そう思っただけの彼女の後を追って、屋敷の入口に向かいながら僕の胸は彼

女と話せる喜びでいっぱいになった。でもさっきは何故逃げてしまったのだろう。暫く考えて僕の結論は犬がダメだったんじゃないかということになった。僕はトムに「先に家に帰るんだ。僕もすぐに帰るから、いいね？」と言うと、足に1度スリッとしてから心配そうな瞳で僕を見つめながら渋谷門の外へ出て行った。

屋敷にはインターホンらしき物はなく、僕は仕方なく重い扉を開いた。中に入り声を張り上げて言った。「誰かいませんか？落し物しましたよ。」広い屋敷の中、返ってくるのは僕の声のこだまと静寂だけだった。さっきの少女はどこへいったのだろう。気になるけど家の人の許可もなく探るのは、さすがに気が引けた。また今度来てその時誰かに渡せばいいか……。帰ろうとしたその時だった。

がしゃーん！！！！

ママが手を滑らせて大きめの食器を割った音に似てる。上の階からだ。

僕は無人城の大きな螺旋階段を駆け上がった。どこの部屋から音が出たのか分からない僕は目についたドアを片っ端から開けて中を調べた。失礼なのは分かっていたけど、僕の頭には金の髪をなびかせたあのシンデレラのことしかなかった。僕は広い屋敷内を息を切らしながら駆け回って調べ、のこるドアはあとひとつ。

一番奥のブルーのドアの部屋。その蒼はどこか僕のシンデレラの瞳に似ている。

コンコン。

ノックを2回してみた。返事はない。

「お邪魔・・しますよ？」高そうな大きめの壺が割れてる。側には血の跡があった。

彼女が怪我をしたに違いない。サーサー。よく耳を澄ますと水の流

れる音がする。音のするほうへ行くと金髪が見えた。

鏡越しに僕を見たシンデレラ。さっきとは違って変わった落ち着いた瞳をしている。手からは一筋の血が流れている。「あの・・・、これ。」僕はポケットからハンカチをとり出した。そういうことはしつかりと育ててくれたママに感謝だ。

彼女の手をとってハンカチを巻いた。その彼女の手は氷の様に冷たくて、僕は寒気がした。

手の怪我で血が流れたせいなのだろうか。

僕はネックレスのことを思い出し、渡さなければと思った。

だけどなんだかネックレスを返したら彼女との接点がなくなってしまふようで嫌だった。でも返してあげなくちゃ。愚かな考えを頭から振り切って彼女に渡した。

「やだ・・・落としたのに気付かないなんて。」

そう言っただけで受け取る彼女の指先はやっぱり凍りついていた。

「これはとても大切な物なの・・・ありがとう。」

お礼を言いながら僕を見る彼女の微笑みはモナ・リザもヴィーナスもメじゃないくらい美しかった。

だけど・・・ネックレスを返した今、彼女との接点がなくなってしまった。

第2章（後書き）

慣れないタイピングで打つのが遅いのですが、毎日少しづつ話を進めています^^・少しでも楽しんでくれたら嬉しいです 読みにくい点などありましたら、感想で指摘してくださると助かります

第3章

第3章 紅に染まる華 チニソマルハナ

僕は縁が切れたかと思ったけど神に祈りが通じたのか、僕と聖架の縁は切れることはなかった。

病弱で両親も事故で早くに亡くしてしまったという聖架は、幼い頃から仕えてくれているという乳母と数人の使用人以外とはほとんど関わったことがなく、外の世界を知りたいとの事で僕を度々家に招待してくれた。まるで夢みたいなお話だった。

だけど本当に聖架は病弱で、晴れた明るく気持ちの良い日にはまったく外に出れなかった。

輝かしい日差しの下でトムと戯れる美しい聖架を見れないのは残念だった。

（初めて会った次の日に聞いたけど犬がダメという訳でもないらしく、あの時は見慣れぬ人に驚いただけじゃなかった。）

トムはいつも僕を困らせるのが得意なのに聖架という時だけは嫌に良い子で、トムにも聖架の優しさが伝えわるのだと思った。

まさか初めて会った時、すでにトムは聖架の中に潜む闇に気付いていただなんて、この時の僕には知る術もなかった。君とのことを思い返してる今、やっと分かることのほうがはるかに多いのだから。

僕と聖架は次第に親しくなっていき、気付けば明日の約束などせず学校帰りには決まって聖架の家に行くようになっていた。

その日学校であったこと、家であったことなどを話すだけで聖架は笑ってくれた。

僕は聖架のあの笑顔を見るたびにどんどん惹かれていつている自分に気付いた。だけど中学生の時の僕が分かるほどに、聖架と僕は身

分が違っていた。だけど惹かれていくのは止められないし、胸に秘めていただけなら問題はないと思っていた。

だけど幼い僕の恋心は隠しきれていなかったらしく、乳母さんに家に来るのを控えて欲しいと遠回しに言われたことも何度もあった。でも僕が行かなくなると乳母に聖架が問い詰めるらしく、しばらくしたらまたいつものように冷条家の門をくぐっていた。そんな風に聖架が僕を庇ってくれる度に僕は、少しは気持ちを通じ合っているんだと喜んだものだ。

聖架・・・、今も君と僕の心はつながっているよ。

こんなに離れていても今もこうして、隣りに君を感じることができ

まるで「ロミオとジュリエット」だね、と聖架と言ったことがある。その時に聖架は「あれは身分違いの恋じゃなくて、敵対しあった家の子供なのよ。私達とはまた少し違うわ。身分違いの恋の話はシェークスピアなら真夏の夜の夢かしら。最近ならタイタニックでしょ？」と言った。「ロミオとジュリエット」をまともに読んだ事が無い僕は演劇部があらすじで説明された、身分違いの悲しい恋の物語というのを鵜呑みにしていた。聖架の知識の深さを知って、改めてお嬢様なんだと思った。

それと同時に少し距離が遠くなった気がして、ふと寂しくなった。頭の中はシヨックで真っ白だったのに、僕の体は勝手に動いて・・・イヤ、本能のままに動いて今までではいけないと理性で食い止めていたことをしていた。

聖架の腰に手をそえて体を密着させ、聖架の血のように赤く美しい唇に自分の唇を重ねていた。そのことで更に僕の頭は白くなった。ただど次の瞬間・・・。

ボーン　ボーン　ボーン　ボーン　ボーン　ボーン・・・

聖架の部屋の時計が6時をつげた。もう家に帰らなくちゃ。鐘の音で正気を取り戻した僕は聖架に謝ろうと唇を離そうとした。そして離れた唇を聖架がもう1度引き寄せ、

「また明日ね。」と微笑んだ。

永遠に叶わぬと思った100年越しの恋が叶った気持ちの僕は、浮かれた心で家に帰り明日の放課後を心待ちにした。でもまさか、僕達があんな風に引き裂かれることになるなんて・・・。

第4章

第4章 儂く枯れていく ハカナクカレテイク

いつもの様に聖架の家から帰ると、深刻そうな顔をしたおばあちゃんに「話がある。」と呼ばれた。

聖架と楽しく遊んだ帰りなのに、お説教か・・・とうんざりした。実際、聖架の家に通い詰めて夕飯すら聖架の家で済ますような日が続いてたから怒られても仕方ないんだけど、それでも成績でいったら優等生な方なんだし恋愛ぐらい自由にさせてほしいと思った。だけど、おばあちゃんのお説教の内容は思っていたこととは大分違った。

「雅也・・・。あんたは最近家に居つかなくなったよね。おばあちゃんはそのも良いことだと思う。いろんな経験をしないと良い大人にはなれないからね。だけど、やっぱり保護者として心配にもなるんだよ。だから・・・このお守りをあげるよ。きちんとずっと身に付けていておくれ。わかったかい？」

おばあちゃんがお守りと言って僕に差し出したのは大きめの銀の十字架だった。

おばあちゃんはその年の割には珍しく熱心なクリスチャンでママもパパもその影響でクリスチャンだ。

十字架は身に付けるには大きすぎて邪魔になりそうだけど、これを持ってただけで遅く帰ってもいいのなら大歓迎だ。

それにとっても綺麗な細工が施されていて、聖架に見せた時の反応が楽しみだった。

次の日、おばあちゃんから渡された十字架を持って聖架の家に急いだ。

しかし聖架は体調があまりよくないようだった。部屋に通され聖架と顔を合わせたけど、その真つ青な顔色に僕は十字架を見せることなくすぐに家に帰った。

最近はずっと調子がよかったのに・・・。

しばらくして曇りの日に聖架の家へ行った。

日が出ていないときの方が体調がいいから、少しは一緒にいられるという期待を抱いて聖架の部屋へ向かった。

いつもよりは顔色はいいようだが、元気とも言えなそうだった。

そんな時、十字架で少しは楽になるかも・・・なんて僕もクリスチヤン思考バリバリ^^：

十字架を見せた瞬間、聖架は発作を起こした。

僕はまさか十字架のせいだなんて思ってたなくて、十字架を握り締めながら乳母さん呼びに行った。その瞬間だった・・・

ばーーーーーん!!!!!!

1階の扉が思いつきり開く音がした。

突然の大勢の来客に乳母さんが慌てながら怒鳴る声が聞こえた。来客の音が家中に轟いた。

「雅也~~~~~!!!!!!どこにいる!?!」

紛れもなくパパの声だった。

微かにママやおばあちゃんの声も聞こえる。

なんでここにいてわかったんだろう・・・。

なんであんなに怒鳴りたててるんだろぅ・・・。

状況を理解できないままゆっくりと1階へ降りていった。

「雅也っつ！！大丈夫！？怪我はない？」

ママが心配そうに僕を抱きしめた。

みんな神父様やシスターのような格好をして十字架を持っている。

どういうこと・・・・・・？

「ここらへんに吸血鬼の生き残りがいるのは知っていた。大人しく暮らすのなら知らないふりをしようと思っていたが・・・。息子に手を出していることを知り、退治しなくてはならないと判断した！」
パパが乳母さんに叫ぶ。パパ達の後ろには街の教会の人達がいた。

「・・・！！」

乳母さんは絶句している。

少しの間の後、乳母さんは僕を睨みつけて叫んだ。

「お前のせいだっ！私達は静かに暮らしていたのにお前が聖架お嬢様にちよっかいをだしたせいだ！！」

(僕の・・・せい?)

僕がぼんやりしている間に乳母さんやメイドさん達が『退治』という名の虐殺にあっていた。

(・・・聖架を守らなくちゃ！！)

僕は聖者達が1階で争っているすきを見て、聖架の部屋へ駆け込んだ。

息を切らして飛び込んできた僕を聖架は初めて会った時のような冷たく深い海の底の瞳で迎え入れた。

「ハアハア・・・ごめん。怒って当然だよ。僕・・・家族がこんなことするなんて思ってたんだ。家族に君のことを話したこともないし・・・。」

僕はほとんど言い訳に近い説明を聖架にした。

聖架は黙って窓の外を見つめている。

「・・・わかっていたの。」

聖架が口を割った。

「あなたが聖職者の子供なのも、あなたが何も知らないのも。だけど・・・あなたに魅かれてしまったの。本当に『ロミオとジュリエット』ね。でも私は幸せだった。人間は浅はかで、生かす価値がないから食べるのだと親に言われた。だけど私は本当にそうなのかわからなかった。その答えがあなたに会って見つかったわ。」

聖架は僕に口付けてから、言った。
「愚かなのは私達吸血鬼・・・。生きる価値がないのは本当は私だったんだわ・・・。」

泣きながら僕に抱きつく聖架。

大勢の階段を登る足音がした。

「・・・雅也、私を殺して？私は幸せだったわ、もう十分。」

「そんなこと・・・そんなことできないよ!!！」

ドアを開けて中を調べる荒々しい音が少しずつ近づいてくる。

「雅也・・・もし他の人に殺されたら、私死んでも死に切れないわ。」

お願い・・・。」

聖架は潤んだ瞳で僕を見上げた。

「うあああああ~~~~!!!!!!」

聖架の華奢な胸に十字架をつきたてた。

「ありがとう・・・雅也。」

聖架はそう言い僕に最後のキスをすると灰になって崩れ落ちた。

「聖架ああ！！！！」

第4章（後書き）

聖架は実は吸血鬼だったのです！って途中でねたバレしてますよね
^^：未熟ですいません！最後まで読んでくれてありがとうございます
ます 次の話で最終回です。

第5章

第5章 華の影で ハナノカゲデ

聖架・・・あんな形で君と別れることになるなんて僕はとても悲しいよ。

だけど大丈夫だよ。

僕は一時も君の事を忘れたことは無い。

いつも君と共に歩んできたつもりだ。

・・・だけどやっぱり君の輝くような笑顔をもつ見れないんだと実感してしまう日は悲しくてしょうがなかったんだ。

でももうその事で悲しまなくて済みそうだよ。

きっと・・・僕はもうじき君の所へ行くことになりそうだから。

きっと君はたくさん綺麗な花に囲まれてこう言ってくれるだろう？

「待ってたの・・・いらっしやい。」って。いつもそう出迎えてくれた様に。

~~~~~ 聖架を眠らせた後の話 ~~~~~

「聖架あああああ~~~~!!!!」

僕の叫び声を聞いて家族がこの部屋に駆け込んできた。  
僕は泣きながら聖架の灰を拾い集めようとした。

「雅也っ！離れなさい!!」

ママとおばあちゃんに引つ張られ僕は聖架から引き離された。  
そこへパパがきて聖架の灰に神父さんからもらった水をかけ、何かを呟いた。

ジュワアアア・・・という音と共に聖架は跡形も無くなってしまった。

・・・はじめに出会った時に落とした金のネックレスだけを残して僕はママとおばあちゃんを振り払ってネックレスを拾った。

「聖架・・・。」

握り締めてそう言っているとパパがこう言った。

「お前は正しいことをしたんだ、雅也。吸血鬼はお前の血を狙っていたんだよ!!」

本当に・・・？ 聖架は僕を傷つけたりしなかったのに・・・？

「違う！聖架を悪く言うな！！聖架は僕がここに通うまで、何も知らずに静かに暮らしていたんだ！それに僕に手を出そうと思えばいつでもできた、なのに何もしなかった。僕が聖架を好きになったから・・・僕が聖架に会いたかったからこんな事に？・・・聖

架を悪く言うならパパ達はどうなるんだよ！無抵抗の人をあんな風に殺してっ。皆・・・みんな僕に優しくしてくれてたのに・・・。」  
僕は泣いてしまっただけでそれ以上何も言えなかった。

家に連れて帰られたけど僕は聖架を・・・みんなを殺した家族と一緒に居たくなくて、家を出ることにした。春には高校生だし、バイトをしながら生活していける。親もある程度仕送りをしてくれると言っているが、僕はもう世話になりたくなかった。

~~~~~

聖架・・・君と過ごした3年間は僕の生涯の宝物だよ。

君にどうしても会いたくなかった時はネックレスの写真を見た。

君のお母さんだけど・・・とても君に似ている。

糸のように細い金色の髪。

どこか寂しげで吸い込まれそうになる海底のような瞳。

優しげに微笑む桜色の唇。

その写真を見てから瞳を閉じれば、まるでタイムスリップしたかのように君に会えた。

その夢が現実で、早く目が覚めればいいのにとよく思った。

・・・だけど君はいない。

側にはいつも君を感じるのに、僕の瞳には何も映らない。
ただどそんな悲しい日も今日で最後だ。

君という色が僕の側から消えて、僕の世界は真っ白だった。

そんな世界でよく何10年も生きてきただろ？

君を待たせすぎたかな？でも笑って待っていてくれてただろ？

大丈夫・・・今、君の側に逝くよ。

第5章（後書き）

未熟なのにだらだら書いてすみません^^・少しでも楽しんだり、何か感じて下さったら嬉しいんですが・・・。未熟なりにプロ目指している書いていくつもりですので、よろしく願います感想などくれると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1167a/>

薔薇の咲き誇る庭で

2010年10月11日20時23分発行